



TITLE:

第9回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第9回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1961, 30(1): 223-224

ISSUE DATE:

1961-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207190>

RIGHT:

第9回岐阜外科集談会

昭和35年7月27日 於 岐阜医大

(1) Arnold-Chiari 畸形の1治験例

岐阜医大第2外科 佐藤 収

32才の婦人。約2年前より後頭部に鈍痛を来とし、約6ヵ月前より激痛の発生を認め、視力障害を伴い入院した。術前のモルヨード脳室造影検査にて中脳水道が前方圧迫転移され、下部にて閉塞されていて内脳水腫を伴ふ上部小脳虫部腫瘍を思わせたが、手術により腫瘍はなく、小脳、延髄の下方転位及び小脳扁桃の脊椎管内への嵌入を認めた。大後頭縁及び第1頸椎々弓を充分切除し後頭下減圧術を行い、現在術後165日であるが、軽度の小脳性運動失調を残すのみにて脳圧亢進を伴ふ諸症状は消失した。本症は成人に見られる定型的な Arnold-Chiari 畸形の1例と考える。こゝに症例の症状、検査成績及び手術所見、術後経過を報告した。

(2) 前頭部に限局せる硬膜外血腫の1例

岐阜医大第2外科 斎藤 晃・渡辺尚

41才男子の前頭部に限局せる硬膜外血腫の一例について述べた。本症例の病歴は血腫に典型的なものであつたが、血管写によつては avascular area を証せず却つて脳内血腫が疑われる所見であつた。手術に際して血腫は中硬脳膜動脈の frontal branch の損傷によるものと思われた。かゝる前頭部に限局する血腫は稀に遭遇されるものであり、見逃され易いものである。病歴、現症等から硬膜外血腫が充分疑われる場合は血管撮影に際しても、必要ならば斜方向撮影を行い、手術に際しても、この点に注意を払つて血腫の探索、発見に努めなければならない。

(3) 横隔膜ヘルニアの1治験例

国立療養所日野荘 井上 律子

私は、最近膈窩腫瘍の疑で開胸し、レ線的に腫瘍と思われた陰影は、横隔膜ヘルニアと判明した1症例を経験したので報告する。

患者は41才の主婦。自覚的には軽度の右側脊痛を訴えるのみであり、胸部レ線所見で右側下野に縦溝面より半球状に突出した異常陰影があつた。

本例のヘルニア門は食道裂孔、ヘルニア内容は胃の一部であり、ヘルニア嚢は肋膜と腹膜であつた。根治手術後の経過は良好である。

(4) 早期に皮膚転移を来した胃癌の1例

岐阜市民病院外科 米谷 渌・安江幸洋

症例患者33才男子上腹正中部に有痛性腫瘤を生じ急速に増大約3週間で手拳大となり来院。時々局所の疼痛あるのみで腹痛食慾不振等なし、此の腫瘤は弾性硬圧痛あり皮膚と癒着してわずかに暗紫色を呈す。手術所見、胃前壁幽門に近く発生した鳩卵大腫瘤は大網膜横行結腸へと浸潤し腹壁に及ぶもので他の臓器への転移を認めず、腹壁腫瘤を含め横行結腸約25cm大網膜、胃の約2/3を切除した、胃粘膜は幽門に近く直径約3mmの潰瘍あるのみで其の他粘膜に変化なく漿膜より大網へ腫瘤を形成す。横行結腸粘膜にも変化なし、組織所見、粘液癌。経過術後2週間で上腹部手術創、左下腹部皮膚に腫瘤を生じ急速に増大術後1ヵ月で右腋窩リンパ腺に向うリンパ管に沿ひ皮膚転移が累々と生じ術後2ヵ月で死亡。胃外発育性胃癌の一例として興味あり報告した。

(5) 小腸蜂窩織炎の1例

岐阜医大第2外科 佐藤 収

患者は腎炎罹患中の50才の男子。入院前6日より腹部膨満感、嘔吐を認め入院前日突然腹部全般に激痛を来とし、嘔吐の増強を来し6月16日入院。入院時汎発性腹膜炎の所見を呈しており、直ちに開腹術を行なつた。腹腔内に多量の膿性漿液性腹水を認めた。上部空腸に於いて Treitz 氏靱帯より肛門側1米の範囲に於いて、正常腸壁の約3倍になり充血浮腫状を呈した腸管を認めた。腸間膜循環障害は認めず、リンパ腺腫脹は軽度であつた。術後強力に諸種抗生物質の投与を行ない、腹部症状の軽快を認めたが、術後肺合併症のため術後6日目に鬼籍に入つた。剖検所見では腹腔内に腹水は認めず空腸は全く正常に復していた。空腸管は組織学的には軽度の多核白血球、リンパ球、組織球の浸潤を認めたが Fibrosis は認めなかつた。

(6) 尿道異物の1例

県立岐阜病院 石山 勝蔵

18才の男店員。自慰の目的で尿道内にマッチの軸を挿入、その4日後より会陰部から陰囊にかけて疼痛及び腫脹を来し、徐々に増悪し、3週後遂に完全尿閉を来して来院した。異物は尿道球部を貫通、尿道周囲膿

瘍、更に尿浸潤の状態となつていた。

(7) 前立腺結石症の症例

泌尿器科 篠田 孝

次の6例の前立腺結石症を報告した。即ち1)76才淋疾後の尿道狭窄があり、尿閉で来院、原発性、対症的に処置した。2)61才淋疾後の尿道狭窄、膀胱結石合併、主訴終末時排尿痛、対症的に処置した。3)42才会陰部外傷後尿道狭窄と膀胱結石あり、排尿障害で来院、膀胱高位切開で除去す。結石は続発性で5.3gのもの1個、主成分は尿酸塩。4)40才、腰椎骨折後神経因性膀胱、膀胱結石あり、経尿道的除去、続発性で尿酸塩、0.1gのもの1個。5)43才淋疾後の尿道狭窄と尿道瘻あり、会陰切開にて除去、原発性で10.89g、2555個、尿酸塩、尿酸塩、Mg, P, Caを主成分とする。6)75才淋疾、性器結核、尿道狭窄、膀胱結石あり、会陰切開にて除去、続発性、11.2g、3個あり。なお第5例は数の上では内外文献上最も多いものであつた。

更に若干の文献的考察を加えた。

追 加 県立岐阜病院 石山 勝蔵

72才 完全尿閉を主訴として来院。20才代のとき淋疾の既往症あり。高度の尿道狭窄を誘導ブジー法にて拡張した後も尚排尿障害を残した為、経会陰式に前立腺結石を摘出した。295個。総重量0.9g。

(8) 小児卵巣類皮嚢胞の1例

第1外科 渡辺 克

9才3ヵ月の少女に見られた卵巣類皮嚢胞剔除の経験に就いて述べた。腫瘍の大きさは児頭大で、組織学

的には主として頭部の諸構造より成る典型的な3胚葉性成熟型類皮嚢胞であつた。卵巣腫瘍は小児期において比較的稀であり、一般に婦人科的症候を伴わず、捻転、圧迫症状等の自覚症状を訴えなければ、本例の如くかなり大きくなる迄発見されず放置され易い。従つて小児の下腹部腫瘍の症例に遭遇したならば、本腫瘍の小児期に発生し易い事に留意し、内診及び骨盤部レ線撮影を行つて診断を行う必要がある。

(9) 放射線照射及び制癌剤使用に対する

Vitamin B₄「Adenine」の効果

岐阜県立医科大学第1外科

渡辺 裕・広瀬光男・神本敏治

佐々木英・遠渡正夫・和田英一

同 放射線科 杉山 公二

悪性腫瘍患者20例（胃癌術後5例、子宮癌術後3例、結腸癌術後1例、乳癌術後1例、手術不能1例、膀胱1例、食道癌1例、頸部扁平上皮癌1例、上咽頭上皮腫1例、後腹膜粘液癌1例、膀胱腫瘍1例、リンパ肉腫3例）のレ線深部治療及び制癌剤投与による白血球減少に対し、アデニン1日20～80mg静注した場合、有効16例無効4例でレ線照射によるものは殆ど有効であつたが、制癌剤投与によるものは最初より60～80mgの大量投与を行わなければ効果がなかつた。レ線照射当初より使用した症例群は照射中白血球減少後投与した症例群に比してより有効であつた。

レ線宿酔に対しても有効な症例もあつたが、赤血球数、血色素量には有意の差は認めなかつた。

昭和35年12月21日印刷

昭和36年1月1日発行

編輯兼発行者

京都市左京区聖護院川原町

青 柳 安 誠

印 刷 者

京都市下京区油小路松原上ル

松 崎 秀 雄

印 刷 所

京都市下京区油小路松原上ル

松 崎 印 刷 株 式 会 社

京都大学医学部外科学教室

発 行 所

日本外科寶函編輯室

代表者 青 柳 安 誠

(振替口座京都3691番)